

表題：第5回瑞穂町の協働を考える会議 概要

- 1 日 時 平成25年8月26日（月曜日） 18時08分から20時35分
- 2 場 所 町民会館第2会議室
- 3 出席者 （構成員） ※敬称略
飯田弘、榎本和己、加戸佐織、香取幸子、川口尊、古宮郁夫、
清水久央、中沢清、野本多恵子
（協働施策推進アドバイザー）
辻山幸宣（財地方自治総合研究所所長）
（事務局）
住民部長田辺健、地域課長大井克己、地域課地域係長友野裕之、
地域課地域係主任福島聡
- 4 欠席者 近藤隆幸
- 5 議 題
 - 1 意見公募について
 - 2 協働宣言の策定に向けた作業（1回目）
 - 3 その他
- 6 配付資料
 - 1 次第（当日配付）
 - 2 意見公募について（当日配付）
 - 3 自由討議意見のまとめ（当日配付）
 - 4 協働宣言の策定に向けた作業（1回目）の流れ（表）・
まとめ用紙（裏）（当日配付）
 - 5 第4回瑞穂町の協働を考える会議まとめ（事前配付）
- 7 開会
座長
- 8 あいさつ
住民部長
- 9 議題
 - 1 意見公募について
（仮称）瑞穂町協働宣言の素案を作成するにあたり、10月広報において、まちづくり瑞穂町はこんな町になってもらいたい、こんな町にしたいなど、町の未来を語ってもらうような形で広く町民の皆さまからご意見（様々な意見、アイデアなど）を伺うことについて説明しました。

【結論】

- ・ 特に質問等はありませんでした。また、公募の内容等詳細については事務局に一任いただきました。

議題2 協働宣言の策定に向けた作業（1回目）

3つの班に別れ、模造紙、ポストイットを使用したワークショップを行いました。

【1班】榎本氏、加戸氏、田辺部長、福島主任

【2班】香取氏、川口氏、清水氏、大井課長

【3班】古宮氏、中沢氏、野本氏、友野係長

・時間は約50分

(1) 役割分担

班長（進行）、書記（まとめ用紙に記入）、発表者（まとめの発表）を決めました。

(2) 意見の書き出し

「自由討議意見のまとめ」から、ポイントになりそうな意見を選び、ポストイットに記入しました。（色分け 緑色【現状】、黄色【理想】）

(3) 意見の分類

記入したポストイットを模造紙の当てはまる場所に貼り付けました。

(4) 分類の協議

貼り付けたポストイットについて、班の中で協議しました。

(5) まとめ

書記はポイントを整理し、「まとめ用紙」に記入しました。

(6) 発表

班でまとめた内容の概略を発表しました。

辻山氏からの意見

- ・ワークショップは最近の検討会議で良く使われる手法であるが、物事を決めるための仕掛けではない。どういう意見が多いのか、あるいは自分の意見はここでは離れているとか近いとか位置関係を探るものである。事務局から「資料の中から選択する」という説明があったが、意見があったら書いて、出してみることも大事である。
- ・皆さんは職業も年齢も異なり、また、今回は行政もこの中に入っている。意見も立場が違うからということであるが、ある意味この会議は試金石になるのではないか。

【結論】

第1回作業 まとめ	1 班	2 班	3 班
町民(住 民・NP 現 状	関心の無さ 地元（土着）意識	町づくりに対する意 識が低い（現状に満足	当事者意識がない 純朴で暖かい

O・ボランティア・事業所)		うちとけるまでに時間がかかる	してしまっている。踏み出そうという気持ちが薄い) 個人主義が多数	町民が前に出る形がない 協働のことを考えるときに分かりやすいテーマが必要 酪農や農業が盛ん
	理想	自分達で瑞穂町を育てよう 住み続けたい町 温かい人間関係 積極的に言いたいことが言える	リーダーやファシリテーターになろうとする人がいるとよい ボランティアに喜びを感じ、社会貢献を自己実現の場とする 絆を感じ皆でつながろうとすることに喜びを感じる	生きがい・やりがいを見出せる町 得意分野を大切にできる ボランティアが担い手 自然に関わってもらえる形 暮らしやすく安全安心で楽しく暮らせる町 人と人をつなぐ事ができる人が必要 善意の押し付けにならないようにする
町(行政)	現状	情報発信不足 (PR 下手) 住民参加意識の不足	PRが下手 仕事意識が強く地域に入っていない職員も多い マネジメントが下手 (ファシリテーターも少ない) 町内会もNPOも同じくくりをしている	スペシャリストが多い PRが少しくまわっていない
	理想	気軽に訪れることができる施設の開放	職員が自ら地域に入り、住民をリードして行って欲しい 役場と住民の情報共有 自立自助の意識を持つ	多様な人達が集まるきっかけづくりをしてほしい 職員に活動に出てきて欲しい
どんな瑞穂町にしたいのか		自然と歴史が残る町 リーダーやコーデ	絆を少しずつ構築していくためにも、「1人1ボランティア」が	自然や歴史の足跡を残し、つなげていくことで田舎だけど東京、東京だ

	イネーターの存在 サイズがちょうど 良くひとつになれる	根付いてくると助け 合いができてくる	けど田舎な風景を残し ていく 暮らしやすく安全、安心 な楽しく暮らせる町づ くり 子ども、高齢者、障がい のある方を考え、緑と人 の優しさがある町
その他	「えん」を大切にす る 田舎だけど東京、東 京だけど田舎		



各班の発表の様子

辻山氏からの意見

- 住民の意識の低さをどう克服していくか。意識をどうやったら変えられるかで
すね。このことについては答えが見つかっていない。
- 今「つながる」という4文字の言葉が、政治学でも社会学キーワードになって
きている。問題はどうやってつながるかである。
- 「当事者意識が低く、人が出てくる場が無い」という意見があったが、「場」
に着目したのは「つながる」ということのひとつのヒントになるのではないか。
「場」というのは建物を造ってここを使いなさいというものではなく、リーダ
ーやコーディネーターという人を「場」に呼び込み、行って損したと思わせな
いプランを作るような人材が必要だということである。
- 「生活の不満がそんなに無いのではないか、従って地域に対する意識が低い」
という現状分析で、その場合、現状に不満が無いのであれば協働しなくても良
いのではないかという意見もありうる。無理やり協働しなければならないとい
う仕掛けはつらいですね。そうならないため、協働の発信をどうするか、これ

は最終のまとめまでの最大のテーマではないか。

意見交換

- ・ 現実にこういうものが協働だというのが、まだ曖昧である。
- ・ あきる野市の菅生の方で里山再生をやっている。地域の方や学校のほか、行政や企業も入っている。自然の方を見たら必然的にプログラムができて人が集まって里山の再生活動をやっています。また、単発的なものであるが、この春に、桜マップを町の産業課と作成するというので、自分や集まってくる人達と産業課の方と一緒に回ってマップを作成し、皆さんに配った。
- ・ 小学生が道路脇に花壇を作ったのも小学校やPTA、町がやっているひとつの協働ではないか。
- ・ 殿ヶ谷や栗原の方で行っている、区画整理の組合施行も協働ではないか。
- ・ 協働事業は数としてはそれほど多くないのか。
- ・ 単発でも数としては結構あると思う。実際はいろいろあって、結構当たり前にやっていることではないか。
- ・ 知らない、気づいていないということもあるのではないか。
- ・ 知らないということは情報の発信が足りないのではないか。
- ・ エコパークに希少生物を植えていただいているボランティアや、町内6、7箇所植えられているアンネのバラの管理や剪定、ドッグランの清掃をいただいている方など行政と町民の協働はあるのではないか。
- ・ 協働といわれるものはすごい数があると思う。その中で、行政が助成金を出して住民の方がNPOやボランティアで行っていることを協働事業と呼んでよいものか。それは単なる委託事業ではないかという理屈もあり、ここで話しあっている枠組みの協働とは少し異なっている。
- ・ 瑞穂町とアメリカのモーガンヒル市と姉妹都市提携を結んでいて、隔年でこちらに来ているが、そのときの通訳はボランティアである。町内にお住まいの英語が堪能な方が来て、パーティーや通訳、レクリエーションも行っている。
- ・ それを協働事業というか、彼らの善意によるボランティア事業というか厳密にいうと違ってくる。
- ・ 町民運動会やサマーフェスティバル、産業まつりも町だけではなく、町民も入っているのだから、あれも協働といってよいのではないか。
- ・ 協働の指針にある、協働の形態には、実行委員会形式や共催といったものがあるので、そうすると産業まつりも実行委員会形式で各種団体やボランティア団体が入っているのだから、そういう意味では協働ではないか。
- ・ これから会議を進めていく上で、住民と役場の意識が合致したものが協働だということがないと違う方向に行ってしまうかねない。
- ・ 第2回会議の資料には、ある程度協働についてまとめたものがあるので、ここに目を通すことで原点に戻り、今まで出たものを見直すことができるのではな

いか。

- これから協働事業といわれるものを作っていけば良いのではないか。
- 町が年中行事として毎年決めて、町民の協力を得てやっているのは、協働に近いのであろうが、この会議の趣旨の協働とは違うのではないか。
- 従来からやってきているというよりも、協働宣言を策定することによって、これから協働を意識した新しい形の事業ができれば良いのではないか。
- 協働宣言策定後、ある程度方針が決まればそれをベースとし、従来からある産業まつりやサマーフェスティバルなどについて、協働を意識し、住民がもっと参加してもらえるようにすることや、主催者側も配慮することで、もっとうまく活用していければ良いのではないか。
- 協働を町民に伝えるとき、「協働することで何ができるのか」やメリットがないと難しいのではないか。
- 「協働したことでこうなる」というある程度力強いものが必要なのではないか。
- 「仕方がないがやるか」という視点も大事ではないか。
- 協働のメリットは何かを考えると、ある面では「行政にあるお金がなくなってしまったから願います」という面も感じない訳ではないので、そこを払拭していかないと難しい。
- 130、140人のボランティアと一緒に里山再生などの地域活動を行っているが、「こうしたい」という意識のもとに動いている人は限られている。「こうやるとこうなる」というものを見せるとたくさんの方が参加する。会を運営して凄く難しいのは、答えが分かりやすく、見えやすい形でないと集まってもいつも見る顔ぶれになってしまう。
- 「協働したらこんなに良いことがある」ということを皆で共有し、それに向かうためにどう呼びかければ動いてくれるだろうと考えていけば、協働宣言の内容が具体的になるのではないか。
- 協働によって期待される効果で、町民にとっての効果、活動団体にとっての効果、町にとっての効果など、具体的にどういうことがあてはまってくるのかをはっきりさせる作業に今後なるのではないか。
- 抽象的であると理解しづらい。
- 地域に出ている職員もいるが、出ている目立たない存在で終わってしまっているのではないか。
- 出ている職員、出していない職員が特定されている。PRはしていると思うので、少しずつした見せ方があると協働を進める上では良いのではないか。
- 個人レベルではつながりが必要であるが、つながりを持つ、持たないは自由なので、仕掛けや仕組みが必要となってくるのではないか。
- 個人の欲求も地域に求めず、また、自分のコミュニケーションも別にあるので、それで十分だと思っているのではないか。
- 職員は230人くらいでそのうち町内に住んでいる人は約半分であるが、関わ

らない人は全く関わらず、好きな人は自分から関わっていく。そこで統一感を持たせるのは難しいが、全体の奉仕者として職に就いたからにはある程度職員の内部で意思決定し、お互い意識付けをすることも必要ではないか。

- ・ 情報をオープンにしていけないと地域の人も何をやっているか分からないし、参加を促すこともできないのではないか。
- ・ 職員も全体の奉仕者といわれつつも町民に対して同じ目線で接していかなければならないのではないか。
- ・ 行政は失敗を恐れるということがあり、職員の失敗が町の失敗となってしまう、守りの姿勢になってしまうかもしれない。また、平等、公平という概念が強く、特別な人にサービスをしてはいけないことなどがあり、そこで悩んでしまうこともある。
- ・ 物事を進めるにも、住民参加や住民の意見を聞いていくと時間が掛かったり、案件によっては議会に出さなければならない。年に4回と決まっているので、次の議会に間に合わせるために意見を聞くことを省いてしまったり手続や形式といったことにこだわってしまう体質がある。
- ・ 会社でも社会貢献事業を大事にしている、やっているところは伸びていると感じる。社会貢献事業なんかも一つの協働なのではないか。

辻山氏からの意見

- ・ そもそも何のために協働をするのかということ町民の方に分かるように書き上げていかなければならない。
- ・ どうやったら新しく入ってきた人と古くからいる人がどこかでつながることができるだろうか、それは理屈ではなくてチャンスと場をつくるということにかかってくるだろうと思われる。
- ・ リーダーやコーディネーターは待っていても来ませんので、どうやってそういう人たちを発見するか、発見ができなかったらなってもらうための仕掛けをしていくといった政策的な部分も少し加味すれば具体的な議論ができるのではないか。

議題 2 その他

事務局から次回会議の日程調整を提案しました。